

日本薬学会第125年会ランチオンセミナー

■ 日時 平成 17 年 3 月 29 日(火) 12:30~13:30

■ 場所 東京ビックサイト 6 階 G 会場

化学療法の黎明期

座長

西野武志先生

京都薬科大学 学長

講演

北里一郎

明治製菓株式会社 代表取締役会長

化学療法の原点は原因療法の推進者であったコッホとその門下生、そしてパスツールらによって築かれた。

コッホ門下生の北里柴三郎は、破傷風菌の抗毒素を用いて免疫血清療法を確立した。同じく門下生のエールリッヒは、秦と共にサルバルサンを発見し化学療法に道を開いた。又、フレミングによるペニシリンの発見、フローリイ、チェインらによる所謂「ペニシリンの再発見」が化学療法、特に感染症治療の飛躍的進歩に繋がるきっかけを作った事は言うまでもない。

日本においても、梅澤浜夫らによるカナマイシンの発見が契機となって国産抗生物質が相次いで開発された。特に新キノロンの開発改良には日本が中心的存在であったし、慢性肺疾患 DPB へのマクロライドの適応解明も大きな業績で、医療社会に大きく貢献した。

一方、抗菌薬適性使用或いは院内感染対策など、社会的な問題となっているが、先達の研究者が営々として築いて来られた資源をもとに、この解決が検討されている。しかし、これだけ複雑化してきた感染症或いは耐性菌に対して、今こそ、化学療法の原点に立ち返ることが重要であり、演題を「化学療法の黎明期」とした。そして当時無かった遺伝子探索手段や、新規病原因子の解析結果等を駆使した新しい化学療法を開発すべき時期に来ている。

近年新しい病原因子の探索の結果、細菌毒素、付着侵入因子、病原性調節因子等、感染症発現に関与する因子が分子レベルで解明されてきており、これらの関連蛋白質をターゲットとした薬剤の開発が進んでいる。

毒素研究も新しい視点から見直されているが、近年注目されたものとして、黄色ブドウ球菌が産生するTSST-1 や腸管出血性大腸菌O157 が産生するペロ毒素等があり、これらの毒素産生が増殖時期によって異なり、薬剤による誘導能も異なるという現象も見られている。

バイオフィーム形成は細菌が免疫系や抗菌剤による影響を逃れる防壁となり、感染症を慢性化させ治療を困難なものにしている。このバイオフィーム形成についても、細菌が環境を認知し産生するしくみが解明されてきており、感染症に対処していく新しいアプローチを提供するものと期待される。

共催

日本薬学会第125年会

明治製菓株式会社